

寂上盛泰記

中

寂上盛泰記
卷上

Table with 2 columns and 2 rows

宗室果能

最上盛衰記中之卷目錄

一 白鳥十郎息女日吉姫の事

一 東海林隼人進出力の事

一 沼の平館小義兵を焚く事

一 山形勢を向く事

一 海味白山岩軍並上野軒謀畧の事

一 葉山宿城佔る秀彌在陣の事

一 庄内悪形行跡の事

一 草刈備前守横行并悪形滅亡の事

一 越後中庄重長在陣の事



一十五里原合戦の事

一高橋山軍并朝日山奈良橋陣の事

一義光公到在内堀に陣しる事

一朝日山峰起并東海林取上へ歸る事

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters '白鳥' and '十郎'.

最上盛衰記中之巻

白鳥十郎の息女日吉姫の事



一白鳥十郎の息女日吉姫の事

白鳥、丸族松長有

人に介抱せしめて居地の山奥幸生と云ふにそのひ
てありしを何者中へん白岩の館主松永春門
中付て此度の忠告にせんとて手紙を拾人程引られ
案内者をして彼の如く家を取巻き鯨波の勢を
何けんらに安部源義経はたけりて強き走り出て中を
は何者か此へ押寄りて強盗の者あるか

怪や名多れとひひるに松永右馬大者にては亦に
白鳥千郎の息女を隠し居る由告志し居る者有に
依て松永右馬の申述に年たり速に以て渡へし
さなき人致を以て踏込に探し申しと源を告ゆ
もあはれ何松永の申述ひよき事し居る貴族の口
上におもせり渡一夜に申す昨日まで姫君と
におもし申すか高千馬の心算を推察して物に
預れて奥州の方思を懸ひぬらふにあつと安祿
源を信置居りて申す申すの引出物と矢一筋
走らせんとて放ち居る何やまこと松永の胸板を

射通し居れば志ししにもあらぬ馬よりとふと居り
郎等とも是に驚きつと引き固半平らるひ事
引詰指詰り矢致を射るに雑兵とも恐れ怖れて
内へ入り居りむかたきて来りこれとて一めき居る
うちには姫君をハ敷のぬけ道を忍むを是より沼の
平とひふわい落し居るも女房三人を付添下部一
人を直に遣し居る一人の童に火を掛け焼あ
くししとひひ源を告ぐ又表へ走り出散るに射れ
居る者の者も近付居る宿の亭主夫婦共に昨日
より此に於て家を出て白岩許人し居る内には

はかりの娘と聲と云ふ車りけおは隠きい逃げ出せん
と一けを源を尋ちて押入汝が親附人よ出言儀
美事いと二人共刺殺て家の火をかけ切て出るに
あきの大勢阿をもて引退くを追詰追ち切伏せ
大者の云ひらる近付もの目も見えよ遠き者も
少中白鳥十郎の息女免のとおね源兵衛昌基自
害まをを見て油を此中に入れよと云ふ佐よ刀を逆
手に持煙の中へ飛入りしと見えそて重巻の敷置に
くま入り谷河をほこひて深山の奥に入りけ
是をい志してあま共い手なみに怖れて近付を焼

跡を待ち守り居る松永の嫡子九郎右衛門後詰
に追ひ来り又う深手を履ひられは神をみて大
に怒りて證えをり立あかして姫君の行末おほか
し山に入りてさかへんを下知しるに雑兵もこと
彼おと尋ぬれも行末の更にはれさうり焼跡り
て見られハ男女二人の死骸阿り扱取入し時に姫君
をきし聲て後ち源を消死しとるはえ有ると疑
ひ多に宍の妻婦おとより来しこの死骸を見
てこれかおとより此娘と聲なりとて大に歎き
かおとよりは身主の治おととて元谷地の者で

元召仕ひし者の身なりたるに依て源氏母も頼母を思
ひ金銀を多くとせ給く居るに下郎といひておぼ
敷く浅海にまきふ忠三義を巧くしし討つて娘を殺し
家賊強らに焼亡しし一 松永右馬九死一生の深
手を有ひ人数多うこれ嫡子九右馬も大い面目
を失ひたるこのおぼを憎まぬ人おぼかりなり

東海林隼人助興方之事

一 孝親は姫君二人の女房と下郎又よともありれ
て歩みたるを女岩根付への細道をたどりしと
初これなるに聞きにくらし道も又くわくは神おぼ

裾におぬけ末をきき定おぼき誰を頼むはともかく小
無をも分るやむ程も夜も曉の頃やう人里も近
しと又くして八雲の鶏の鳴きをたしし心も落付て下
郎も同じく是にむふ岩根沢日月寺と申山寺
まじりと云ふに沼の平といふ所を幾程をといひ玉に
或給て計しとて是にゆくとくく急せしと申す
向山の方の物の具おぼき者十三三人張樂をおぼせ
し是はししと馳せ來りて先よまといふ人の云ふ根
くく急せしは山中を若し姫君の御身の上
に懐我も何れも天子の跡も源氏を恨む時にか

せしおし土橋の者の者と見えあらば討とてとて
近來の福は漸く土橋の思ひをあらしめて沼の
平の人とらとせしむる可く思ひて申し年た
けこの男甲をぬきてやらるは東海林集人財中近
に死出たそと張興は高きまじやせし名き沼の平の館
に着けけち土橋の松永九郎持越の大勢の人数
河連れあしを尋ねて追掛来りし由を見ん
大者まて云ひ多きはしあま打るは東海林の人
と見えけし外山原に在むきて姫君を奪ひしりて
何方へ来りせしを松永九郎持越は是れより速くは方

返し渡されよさなく遁きを打取中へしと不知れ
は東海林の子息二郎昌勝十七歳ありしが長刀を振
て先へ又進み出て大者の中へ入りしに松永九郎
も見えぬ中され程くち新鳥懐に入る時将人も是
を憐むおひひり増え士の都るを外に見んや今
十郎屋の没後たより方なく渡りせ玉ひて我おら父
集人を殺し思ひて安部源兵衛昨夜馳来り涼く
馳きながら迎ひし我お馳を乗りし我おら働を
申して後日土橋屋の耳に入しをむひとて長刀
水車のことく振廻し切て出たは孫く一門宗統の

者切先を揃へ火花をちらりて戦ひ多松永方には
大勢といひ其昨夜より働にはたかれ先たぬらひかぬて
引退く東海林二部傷に乘り進み多程に松永
より返し退きもつてかりたるも松永も儉組の細道か
まゝ大勢一夜に怒り合ふまゝもふく松永東海林互
に押合ひて引退く傷への谷に精の落良等も互に
互を討せしと周章ふとめく所に二人たかり上に成
下になりこちひ落るる松永三十計り此血をまきり
東海林心猛しといふは年がたれ終に組志かれ
既いふたれんとまゝ所東海林心まゝたるものあら組

あれあうり松永を二刀刺れ松永力弱り眩きて
終に東海林うれなる部おし松永一類麻目兵
庫下り来り東海林いふまゝ怒り東海林労れあうり
榎根よりち拂ひ多に兵庫へ服後切付とれと作を
倒れ多きを多かりかつて首を取て立向るも松永東海
林より良等下り辱せしを引立二心の首を切先は眞
きて大勢に唯今敵の大將宗徳の者も首二級取が
東海林次郎昌徳生年十七歳此初陣を人々
能く見給ひして味方の陣を引にたる松永方は
是を見て大將討れしとれ志多きに成り引退く

平沼の平の兵を追討せしむるに如斯く何れを以てた
まらざるに土橋左馬助を始りて終末左平右田原右
多助以下河内由と討死せしむる歩卒は少くも支へん
能れざるに近付行くを追かたぐるに程に散くに成て
近付行きたる東海林方に狼とを付けて沼の平の
鎮を引取りたる

沼の平鎮義兵を擧ぐる事

沼の平なる者は月山の林原岩根沢と云らして險
岨の山道を越へ谷川を隔てて人馬も通ひ難き要
害のあるるに勇猛の東海林一門與類をかこむ

舊將を集めて武久が遠助同宗女木戸太郎
右馬助上等の雨洒田満と魚沼末吉六生田九
右馬助等を胎め名をばらばら者二百余人家の子良
等都て二千余人とありて一し東海林隼人助は
沼の平に籠り子息二郎昌勝と云ふ岩根沢の山
奥鴉川と云ふ通ひかき下は俄か柵を結ひ廻り詰
の城にお構ひ人志を以て兵糧矢玉を運りて日吉姫を
娼女性童等を恐をもて救多の兵士を立寄堅固
に守りせかして沼の平にこゝ山形勢必らるるを察せ奉りて
とて用心堅固に待たせり去程に白岩松永

父子討死とるより委細の由山形表へ注進に及びんる

山形勢勢白のり

去程に義光公白岩より北浦へを寄る先臣を集
め評定に及ぶる矢桐相模守中々々々今夜松永
父子討死に命を以て敵村をを籠るひつて高河江
谷地の人民に心替りしとて二面方にお火可しとお成り
聲し早東に出馬有て凶流中退治をあらしし中
んれ諸人むと同く多に義光依せられけるは友
の軍にはやりかゝては必る味方の不利ありし彼の
東浦林集人助逆をを合も諸人をかくまひ溢れ者

を命集め海嶼の山奥に楯籠りしを討んる味方
長陣せんる悪あつし水詮以方より打捨をあら
彼もとより打捨此者共あらぬ日敵を殺して得
ましとる敵軍を以て和談させよ力攻にせや力くは
作せられぬハ氏家尾張守以控市尤に以て去後
の東浦林より先年庄内郡を越る岩地と取合の時六
十里越志津に馳向て庄内の大勢を唯親子兩等
かいて追散し救多の共を討取て白多十郎も其戦
功を賞されし程の者にて水沢細取中道寺の村の人
を打随ひ要害堅固の所を落しも降参も

容易あらざるに謀を以て召家ら水に旗下に被成
ひく可也と申され、我光と申言は成則
志村九郎左衛門尉前をさし向けられ白山岩の城
警固し沼の平に押し守らせらる時は天正五年丑
五月七日ありし

海味白岩軍第一謀略の事

さて岩根沢の要害を堅くする處海林七郎武政と
て南平十六年の為者有り家の子勝木九郎左衛
門に言ひし言ひ今夜白岩の城に山形より大勢馳集り明
朝定ては方へ押寄せし戦有べきと覚由志がらハ

今夜のうちに夜討し海味の要害を始り白岩
城を打落し去しし言ひし言ひ作立九郎左衛門も大將昌
勝後中々を評議一歩の上りし言ひし言ひ
昌勝後中々を評議一歩の上りし言ひし言ひ
からん事か言ひし言ひ兎角明經評議有る事
申言はし七郎武政進んで中々を評議志がらに
物取志がら近隣款に加らざる防たか言ひし言ひ
の後詰の来し言ひし言ひ味方の言ひし言ひ
を夜討しし言ひし言ひ打出せん大將昌勝もたも同心して
取明志がらの勢ひ益々し後詰の續かぬうちに白岩を

攻落走しし其勢武百人余部ありしを以て之を以てける
先海陸の昌勝白岩の武政大将にて出く谷く
鳴き走りて押寄る海味只の草薙敵前一千余
いて海軍のめりかもの見を出しかりを焼きて守り
りるあちよく敵討の大將昌勝百人余一年に成て
おあちよく敵討の用を了し戦へしは海林の必
死の戦いに切立られ陣屋に火を懸けられへま
るきまら折れ大将草薙の腕を立云ひおひ無
き者世を不敵僅少勢あり追立お取れや下知
して自ら長刀を振廻し先に進んで戦ひける

東海林新設意と以て者逃りて突倒し馬より
落るおを馳りて首を取らる横田主水遣水
動右衛門と文主兵草薙を目の前より討れてあか
ぬりくおと新設意と左なり馳寄り押寄る
取付くまを斬りて逃る事ともしも右にわら横田を
海の上帯共扱へて投げ付け遣水を懸押入る
働かさん鞍の前端に押付く首をとる此働に肝
を膚へ大柄の討れ火に成る燃えれば雑兵も白岩
きいて引き退く昌勝の兵も廿人余は追打し
引返り退取の要害を堅めり白岩は志村

九ふを舟を船が海口を前綿衣十番熱人数二千余
人とのぼるまのころ舟を物取きて後の山に名を帝さしく
み頻あれば大ね志村丸ふを書法中に向てゆんぬ
如何様今物の祈後の山に歌近付くと受え由必物討
と受え由付ると相具波とれよとすううちの海味は
の火の子天にを渡して見ゆとあつたつとそとふ内
以後の山まり 相取数多古来より物廻りの兵是を
又て強きまふふ丸の堀を今越へ打入りり
必物討とといふうちに大ね武政大音は沼の平の先
津東法林七郎白鳥十郎後の吊ひ軍して一番

今波不我と思ん人々打出もひやとて喚き呼んを
切て廻る僅に八拾余人の兵とれとも一騎崗千の若も筑
い大分長刀の光り城中に余りて又之を城中の者
周章そと戦ひに櫓も火かりや中あり北所を
突き堀を越て迹りい多かりき是をえと志村丸も船は
白旗もき取あり打取もや人々も踏止りて防
ま戦ひたりとか火城中にはひより度はこれ力及は
落のまて空の江に幡出陣取し武政も引退を
白岩松の巻と志村に也一は控たり
去程の二叶軒は山取の命は仰りて相思ひ出起す

宿屋をわたりて月山を越へて鴨川の梅に寄り
東海林及び日吉原を視てきたるものと和睦の義
とをきりしれは身人助も止むはも承引しと
一門も和睦の契約をとり数ヶ所の陣を引揚
げ平均の沙汰よき故にける

兼山落城佐々木秀經在內入落行なり

一 兼山鮭延と云ふ所は山形より二十里北に當りて領主は兼山に在城と云ふ天皇九代の後胤佐々木源三秀義の曾孫佐々木四郎高綱の末孫佐々木典膳秀經と申す其生年十六歳の面方十奇り具次五伴北武士義光の下智に随ふと云ふも秀經未だ若年と云ふも下智に隨ふも此日義光公使者を以て山形へ出仕有るも由依り此日秀經大に怒り我が佐々木の家も王孫にして姓京圖も當るよし殊更伐りの弓箭の業もあり今義光威勢強大と云ふも系圖を捨て降参ると思ひも

と以のおひりて使者歸りて始終を申上る義光公召死くは時日を移さとも押寄せ入をもとて其勢五千余騎時々天正十四年丙戌六月十日山形を打立鮭延は敢向と兼山近邊に在家を放火と野陣に羽音未明に押寄せり義光近所の三山に登り城の神を見おひ西北は鮭川と云大川城を引廻し南に深田とて赤平尾離れ東向の山城あり平尾城を掘り却て逆茂木三平に引柵を振廻し川中より乱杭木柵を流しおけ柵々を徹し候りて待居り義光公見え入ふことくし候の要害如何成者お籠るも敵目を解きしと落城せし

水も地の利なき城あり方ら青き水より下りて近辺
を焼き拂ひ西の方鱈川をこきと宍きこの方を押しこ
向の陣を取山の腰を堀却り柵逆茂本を引き敵我陣
と埒り城中兵糧の尽きを待かけたり城中より徳に救
日を遂り退屈して見ざるは城中井一口有る水不足
あり故に救なく難兵少の沢色に忍び出て水汲て
れ兵少を是をえりて次の板兵を救を待居る城中
より動と知れ作て日暮れに板十人水桶を引あき
沢邊に来るを伏兵一夜に起り其中より取込一人も
さし打取る者紹ゆて安んずると思ひて次の救難兵共
先より宍の者百余人跡より立河で水汲下りる
者亦は伏兵と見りて例の如く取込取込折れ
と志を散くは射立られ討る者言なり多かる亦に
近邊に陣取る者草薙備前守嫡子武田兵庫頭季
満是をえりて若黨五人引連れ横合にかけ入敵无切
て落し火花をちりて我し多に城中の者散るに射
かす程に主従五人同じ枕に射依せり家々大勢也
向を向けぬ城中へ引入れ方なく中陣へ入りしる
は甲冑先公少少大勢なり此城を三月十日に
く已と落城す少少の事目を見たり未だ此層を志けり

予この以後中作より下知あまに打て出る事は急夜軍
法を以て討たしむると簡のふ城中より兵糧尽きて二三日を
過ぎれば信を以て死城せば後詰の勢もあく只やみくと鐵
死せし精力の盡きさうちの花やた一軍討死して居る後
代は殊えんとて大手此門を突きて夜に圍を作りあけ出
れんと兼て下知を破るを今柵より外に出せりたり
城中突きの遠くをわきの柵引破る敵の的あり
やむくと亦なれん付入しせらるゝと前後不知と城
中へ引退く家集是を以て追はれ只守り詰て居るれ香
綱宗徳の人と評義しんを圖書し助進し出建し城に
て切を立んま成りかきし君いふくや若居あれ末頼母く
いあり業を鮭川の一方敵取巻き先座内へ退き
時玉を而待有と能くしと中へ入つ同は義宜しはし
とそ中なる香鑑少時と思案し誠は善れや余理に當る
ありそそ夜夜の内は皆く舟にあり座内の光景を絶て
は居りれれあま此種をうらむり義院公の中より
は海河より能く守り三百名隊を濠城を守り也
七月上旬山城陣陣あり終り也

在野悪臣飛行跡之事

出羽名在野の領主悪臣飛龍と申す代々羽黒山の社務
職なり其初武臣左京大夫政氏と云そ子四郎入道淳
真そ子新九郎入道淳昌と云正俊羽黒山社務
と云より毎年金内とて官大夫にたり位五位に補せ
らるる民を接育し五世に家富貴なり近五の輩まで
たりき随ひて孫孫に四郎左京大夫義氏と云ふ者の
代にあり社官を嫌ひてそを去り武家を好みて羽黒山
社務職を前森筑前守と云ふ者上旬の者とて代
継に改し中旬下旬と云ふ所河村の在るもの物

此の如くは至そ身は酒遊興の之日を著し社務職
と申すは清臣飛と申すは觸廻しを頃天下の武将
織田信長の義氏より遠西のるも此の使者を以て中
旬下旬の間に武臣出羽守と云成下る孫の義氏日夜
殺生禁断の場を憚らば遊獵して下民を苦しめ
酒を好みて見自能き女を人儲と名付て我飲に集め
各名家共諫言中族に誅せられ或は押籠められ故
後人仕むる追蹤難きをよしと著る傳ふに
悪臣増長し人恨みしとみて内々やま悪臣飛
と云ふ孫の義氏に實子と云ふて甥の丸岡兵庫

義興と丸尾為嶋の地取成りしを世嗣にす其身三
十歳にて隠居し隠居市水と稱してまもなく傍者五人の
振舞やまきりたりと云ふ山北由利郡に八郎と云ふ
成りたるも武勇傑れし人有り我氏彼の八郎を青丸
落走乞有り時に老臣共味同公を令て由利境彼向の
所を進めしを我氏救千人を催し先山北由利へ責入る
所まきり其日吹浦追馳向ふ事相違したり久軍大將彼
是延引して二日追逼道しこれ諸卒不審に思ふ所に物取
た谷羽黒の長束前森筑前守進て出りたるも今度の出
陣催しきりり山北の軍兵はるも諸士何れも存知通り

悪居形を亡き謀事ありし時刻を移さず攻よとて二
手に成て尾浦の城へ西へ返し夜入て攻戦しなり
我氏思ひつゝまきり近有僅の人数を打出さ
る前後ゆらん敵をかりて攻むるを我氏しもの我氏も
たまりかぬたるも流矢にあたりて落馬し新森園と云ふ
ところ終に腹を切て失にたり吉程に今武後家の七
んまきりといふ程よ取扱ひ和睦して兵庫政義興を
尾形と作まきり人今又無道にして我氏の異言らる又
義興にも實子なく越後赤村上の城を存し庄重長の
次男千鶴丸と市水とを養子にして左京大夫義徳と名

孝なる義貞と存在重長と盟を結び隣国の睦をふ
しく威勢強くと多道の振舞首有り衆の諸人あまきんて是
も尚悪居形とを申しける

一義光物語に悪居形武友義氏の討れし天正十二年
三月七日の事に出せり

一鏡に尚悪居形武友義貞の事を小畑少将光安と
出せり羽黒記に扱れ義貞にして光安と有る誤り

一元在の古城大宝寺の城と云大宝寺に在鶴岡近代最
上家より改稱を其の出羽と地圖に今の鶴岡の西北に武
藏家の古城跡と出せり

草薙備前守横行并悪居形滅亡之事

一山形より北二十里に在内尾浦の城主武友兵庫政義
貞と申す者大悪居道ある故に悪居形とを名付ける
かゝ所に佐末典膳者綱兼山の城を築て一族引具し
悪居形をたよりて諸行を爲義貞對面と内々貴
族の凶妻ゆ及び知能なきを申出たり義光同西とあれ
ども不知にして其信を以て方々押寄せしむと評
義もあらん何程の事有まじ申せあるとと秀徳一
族跡をたかくまひてをり去程に義光公兼山より瑞陣
有りてあり雨夜の折ふし草薙備前守を宿所と召れ

終夜密誅りて退出も備前守あり種々の横行

はのり中も鷹狩廉追を彼所と酒狂ひに犯ひ出りたる

か水晶山に登り殺生禁断にもきりしとよく廉追ひる狩

しと家伝に犯ひたる此山と云ふ山平に二社あり一社と

大和神と云一社に親世音菩薩是を水晶山権現と崇

めたるなり半腹に経り七尺計りの山岩穴あり異類の

水晶の花形有りて穴の深さ知る人ありまより少し北

に布衣を云あり言さそを丈楮八尺計り岩穴二つに分け

しと如く成る巖あり是も水晶の花形あり依て水晶山

日輪寺と号す昔し東根の城主小田島備前守平の朝臣

長義の領分故にある時罪人をは穴に入れて死せしむる彼者

云ふに中に詰捕りて世界のありと語りたるを誠に天驗殊

勝の山ありよありて義光公にも殺生禁断の札立をよむ

けり亦く備前守あり我傳傳し故に義光公少玉を以り

外市立復まりしと我の中を治めはは義守の少墓所

もよきと思ふに在松の惣領不届の由者ありと追放

作自りたる高續は是非を在内へ落行き悪厄取

を頼りける義真は備前守り美傳八少山形より呼歸せ

ふとい歸り者あらむと即ち近習より召仕しける備前

賢き者義真の心を伺ひて其外近習

我様は金銀を以て魚川といひ情を厚く勅めし故に備前
無そは叶ふと日々出仕深き三年の内は色分の知行を
玉きりたる物多し其の普代の家の子海老名中務安景と
云ふて六丁に餘り光切あり嫡子入り方次郎と云ふて
十二歳より多しを尾形の近習に召仕をらし少人の諳り有
とて指懸し玉ひたる親の安景歎の中にも余り中懐なき
其かふ若輩者の子少の諳り有れども安景叔度の
忠切も中懐有るまゝ返ししと中懐ありしと世に頼
母しけり我の領地言坂に引籠て歎き居たり
しを悲まざるをあかりたりされども主人の望へを恐れ者

信を多考あり草刈備前守夜に入忍心して首回坂へヨリぬ
りき親しく物語しおくさめける安景未嘗限りなき悦び
後を諒りし心まゝ吐合なり其夜の物かたりは安景
諳りたる先年越後志村上と合戦以後夜々の戦に
度も不覚をともし此に忠切を抽へ何卒以人を一玉の
大物も成したく心をくまき座内の主とせしなりと云ふ是は太
はむらひ成るに於て中懐知如一子可次郎千方の右邊
有るも其の年暮の心を感し一度に赦免ありたり
情も各敷ゆふ骨籠し連々夜も安く眠らぬ
を才意を焦し其の字も止む時ふし此の志力いふ成鐵石

城より和後止ましくして佐々木秀徳を殆め宗徒の者を相
見し一里程駒を早めて陣をある事と志の事とありしを
備前守中丸の火をかかれ折ふし魔風烈しく黒煙天
に垂れ火焔の方向に飛ぶれ悪風形を殆め近所の者を立踪
きり多所を備前守切てある事坂より一安景二百金路にて横
倉に打つて悪風形三方に敵をうけ如何せんと思ひし所又
備の内より備を立止し悪風形の旗元打つる義光公
此市陣より押出た佐々木秀徳安景を討えんとす
るに備前守是を免て叩退は如何思召る屋形の滅
亡の時を此より早し義光公へ降参られし心へこれに

秀徳中丸を打つありき言續之事になり屋形に
背ありしを此屋形の旗元へ屋形崩れ南をきして逃
れを逃詰り討取る悪風形逃出の者十回五人討
たされ焼字川の邊まで落し伏兵起りて引返し借
も無事の次身あり備前めか義光の勢を備りしを
と知れしと云あるしある事と口惜し氣絶令一方打破
落しりも敵十方を取巻て落しまし所雖義光の旗
元へ切り討死せし事と既にかげ先と志の事と近
所の人々押道め義光の旗元一里計り隔て水が寄付
かきし難兵の事にかり強んより安景にて此自害有し

と申すに流矢弓矢の服に當りたるにさしもの猶抱され
叶ふまゝと申すれ先馬の上より鏖戦捨腹の事切て失せ
玉ふ時に生年二十三歳天正十七年己丑四月十三日と云
文に先年先を見そ近習十人交を先中に押込一人
も強さき討取り悪名取義貞の首を備前守討取
義光公の實掬はる迄と云ふ中森悦限りなく備前守業
内にて域中に入玉ふ域中より危形の一族女房を煙の中
飛入死せりも有り落行くも有る可も先取りりも次第あり
叔草薙備前守を仮の城代とて佐々木典膳佐々木
越前守に成され本領跡より鯉延の城に移され同

浦老名安景をさしめ連判の事皆々出され本領に加
増され中にも安景の悪名取の跡式と云ふ事と云
られこれの安景の跡の類籠有る存せりも私義代りり
と討取りりり本意に小目きりしを諸人の難苦を見り
志のいそは味方中より殊に翺子もこれと云く幾程の栄花
を保り半そと云様の不義を企中と云くや只以て仮の中厚
君の御暇を中後と申し上を水義光公の威ありと云
草薙備前守を仮の城代と云く同月廿日は歸陣あり
去程に武後義真陽平公勇将取ら同並提の為に加茂浦
に一寺を建立有りと圓融院と云く寺領を寄附し玉ふ

その後東善寺右馬頭中山玄庵を東渡して友人を尾浦
城の郡代に遣へし草薙備前守を山形へ返されける
叔中務家の子に配るをよみて生身は新島をたし
て出家し隠ち大和玉金峯山に引籠り初めをぬくと
終に半庵とて没しし志願す又加茂浦圓融院を
後に鶴ヶ岡に引移しと光安寺と号しけるを

越後の中庄重長庄内出陣之事

一 去程の庄内は東漸寺右馬頭祐直中山玄庵朝正を
副へ友人尾浦城の郡代として諸事執行のなる能員
追々友人の執扱方私曲にして新法の沙汰多かり衆諸
人南時の成敗に歸せし皆々恨むうとみまゝに折やし哉
後五中庄重長次男千徳丸危死滅亡し砌中退落行き
々々敗軍の之恨有る依てこの夜密に便軍を以て志
人たかきよと千徳丸旧好の士世に土佐林甲斐原田佐次を
を始り各評美しと却の如き死授まゝ中より万民の愁ひ
堪ふとし上杉後慈悲等の大和と承る早し上杉後

中軍勢を引寄せ味方より一時移りてある浅水
如河成るるに逢ぬらんやと討りあはしと急ぎ連判起證文を
認めし旨注進し水上杉及大坂の兵ち中軍に出雲守
重長を大將とし数千騎を率へ發向せり由陽水なく
風吹有る水右馬路之番の西人太に發せり急ぎ山形へ注進
志守兵義光公より寄らるも思召し早速草野虎と助を大
將として数千騎を率發向られ義光公より退行發詰有
入る中にて虎と助の急ぎ尾浦の城へ馳付西人に對面し
軍評定相定めける然るに右馬路中城の女童
其を敵に取らんとす口惜き次第あり是を敵上へ送らん

とては可言番に中軍の言番を某ひたりは戦ひに淺水
女將を引連れ落行なり申言にあらは後代迄の耻事の中
思ひもよらんとすといふ水ハ虎と助貴族の中これ分たれども
城中の女將を敵に取らんとす却て世の嘲りを重くして右
義を輕んぢるありとて上城中に妻子を縛し其妻を引
きて思召の戦ひ叶ふまじし然るに君のた具諸人の為
水に早し召具し玉ひとよまれそ言番の西人の見見に任
女房を引具し大綱を引落行まゝなるに六十里越
北山道下かりて近道の世武士とも數多出合ひ落人お
取水を勢をまず追來る言番を見んて其の者もた

いふ事今あらん打掃をんとすれは内女帝皇に入しての奪
それ後代の恥辱なり先急を向ふの事追登をいあらり
は道一筋を追来るも生時近くと引うけ事いふに當るべし
と急きて岸に登りたる急流細道一筋に款一舟にあり
て追かき去る番長刀を打振り追来る敵を打掃り一掃
もなく谷底まで下り落され敵にありて逃れざる一舟の者
は勝に當りて追行る番長下知して野武士を先れ首を奪
に及りて長追ひ走らざる人救をよそり程なく山形へ
送りしけりといふ事

十五里原合戦之事

一 相城中より東漸寺右馬路草野虎助に中へ負新く大
軍を引うけ城を守りて戦せん事かゝり及し所詮途中
出立を防戦せん事存多き事由是て打出強ひとあり二
手に備を立午安川を前に當り大山川千安川の段に
を接し城より去る離れて陣を取る平京田中京田を
後に當り尾浦の城を腹に見出しける雑率にむる追
て羊取上の者これ死を喫しと少しも屈をなさんとなく甲の
進んて扣りて去程に戦後の軍勢二万余人の中在重
長同勝頼大將として雲霧のこころ攻め来る玉人も是れ

相違はりしを案内者より移すに実小玉越濱辺浦を
押すに後陣小保がさうの山中に交り直江山城
守後陣の大將をよる水松系常陸守等先陣
重長を見送る玉境に入りくを吹入し去留先陣の越
後勢濱路を回り加茂坂の道にまきと云所の後方に
陣を取り大山川を前に南に担ひより宍上勢とて留す
五丁を隔て川二筋を狭り越後勢の後陣の強くなれ
て自らを善に東流寺右に以て宍上勢今や遅しと
物見を出して待所に越後勢五丁に備を立陣を堅め
て静り居り草思虎助是を見ても右馬匹にかけると

いさかひ方より押寄せ驅散さんと右馬匹の中を款間
二丁下に有りて居る大勢にけ方此小勢にて押出きから
二度利をばさるも二陣三陣入習ふ味方芳忠を敗
せん甲よりとあひあし一處に待たて戦ひ大將重長を敗
らふ討敵が末く自ら出でて此方よりかけ出て戦ひ
芳忠大將重長を討滅せし侍りて押来る思
ふ圖に引交重長を討取しと免角を思し芳忠は
互の陣をわしと禁て担多越後勢に款城を奪く難
水出て殊に思切る料あるは尋常にて利をばさし
今然れ体身して軍の暗知の刻と觸れぬ寔と思ひ油

斷其しちるれ一二の備は其俣ありを焚え扱三陣
五陣二年に成り鳴りを静めて廿丁計り川下へ廻り代
を渡して二ツ井河を越へ田道河原上り款の後入道中
京田より昭松を毒し鯨波の勢を仰け一年に左の河原
より横谷にかりて前の川へ追落せん事掌の中ありと
謀り多城兵動と志をも今宵は体息し寐入とも
何れ先陣はあしく物付もやと用命しれは後より
如経しと八思ひもあきさる事や左の油断しと居たり
々多所に越後勢平京田中京田の方より其間下をうり
に馳走て俄に昭松を振り立鯨波をまけて後陣の

先中へ切を入り左の河原より切りかり志を宣上
勢離れ立て後陣先陣の間に周章をまき越後の
大勢の急ぐ打まき程に城兵大に敗走し虎し助
取返し戦ひけり左の東漸寺右馬路も後陣を助えと
長刀を握曲しかり出るお路ふ寂上勢前後をくろ
めて戦ふも受も款云云此如く入り暫り立替り攻勢
るに南朝も強り少あす討事をせん今や事分はては
叶しとて二人一所にありて激戦し一隊二隊を打散ら
し物々四方を見出しに心知り者も城中へ火をあけ焼
立る火免矢倉に充滿しれ雜兵も是を死す途

と失ひ敗走し、越後勢を道に実塞き、取巻く討取を
常呂虎之助も救へずの事原にて今、働る甲討をし是
迄より、腹かき切て死し、その中に右馬頭何と加
思ひえ首を引提け千早川を渡り、款の中をかき分
け、只今川端と右馬頭を討取て、大物の実檢に
入り、と云ふ事、いかに、手柄由り、成り、その中を、明け
て通し、大物重長の前に近付やいさや持する首を
指付けて、走り、かり、重長の生、甲丁と切付、左の身
を切込、とり、るを、逃るの者、は、驚き、前後左右より、取巻
散く、討取、れ、ま、ご、くに、切られて、失に、ける、新て、重長危

き、雨を、逃れ、右馬頭、首と、太刀を、上杉、殿の、実檢に、入れ、
ける、打、死、され、し、兵、將、時、の、戦ひ、は、五千、七、騎、討、死、し、越、後、
勢、も、八十、余、人、死、し、たり、け、れ、時、は、天、正、十、七、年、秋、
千、早、川、戦、と、い、ふ、事、の、戦、ひ、の、事、あり

義光物語に云、東海寺右馬頭、常とる、太刀、相州
正宗の、銘、認、し、も、長、さ、一、尺、七、寸、是、を、上、杉、景、勝、上、中
景、勝、より、太、田、秀、吉、へ、上、る、後、ち、鏡、川、家、に、傳、り、て
今、紀、州、家、に、傳、る、事、あり

高橋山軍、朝日山、奈、良、橋、陣、事

一、去、程、に、中、山、玄、番、女、者、の、落、人、を、取、上、り、送、り、て、以、度、軍

は浅水し中生前の跡合に思ひ白岩迄お送りし取て返し
主従五千余人六十里越に撤りて庄内へ名きくら所向ふの
坂を馬武者二十騎もかり打てのゆる人あり下部を走ら
せ言おるに護人そ庄内の中加勢あるは同道申さんと
いをもれは是は沼の平の住人東汝林四郎大夫同く新左工
門あり名の中觸に依て義光公に出陣をせ行ふ折に諸勢
取調への為一あ日申延引の由故若し其間に軍破れず越
後勢定めて乱の事もあらん代と先一日も早く先陣を心
かけ彼向淡く方所に貴族勢に追付れ中より庄内表
北次弟如何にと聞かされは云番急しくれも軍の次を語ら
んと云々するに四郎大夫云々もろまゝ云双とて語り玉ひと

馬引あせ云々もれを云番もせとて二騎急双とて志津が
田変候と云お妻はゆきねえ人供或者僅多れはあとり
續々を訪むありと郎おとち中もれは片時も早く尾浦を見
張んとて息をほそむを打とりたりかて大山の方をえん渡也
い黒雲の空を覆て煙上る所見る東汝林四郎大夫是を
見ると是の心か横城なりと所定も煙をのぞき見たり打を
人をもて勇を進んて地よりなり云米軍もよく以煙尾浦
の城にお高言ふ早落城とおんて四郎大夫後如何
思ふれり味方敗軍は必定あり心愛は後詰を待たし

に搦る状相なりと自然と云ふ東法林を伏を奪ひ按見
しと云ふ一宮坂左馬の後見土田友右馬より状より多敷止
むきふにわしき急せくと打程に加茂坂近くと進て款
陣をえ後共中京田平京田千安川大山川久留女木田
原山坂にまると旗指物もろりたり 屋浦の城の西に當
りて沼の有りし所に丸岡兵庫之手に備りて相より千安
川を越えて大山川を渡りて大物重長乃本陣と覺へし
四方の伏へ度と相より久留女村に本陣在務頼亮
へ悪形形の旗指物もろりたり 其勢を奪ひの如きなりしと
僅の勢に中しく通るしと難く入りし満して然りて戦ふ事

思ひもよきも殊に之等の軍に打勝つ事なりと勇を相
存に東法林は右大馬よりかたに千余騎騎兵に在る事
人ともよき事なりしと千安川より入る事ありくと亦てある中山
云者幸々余騎相合を勢に奪ひて入る事ありしと東法林の後を
取らしむしと中陣をえ見あけて入る事ありしと中陣を方より
中陣を破らしむしと入る事ありしと戦ひある東法林駆入る中
山務き中山當る事東法林より相り云々十文字京懸
け破る事大山川を打破り久留女村より中陣を通る
越後方より相も不敵の人と武孱く味方も入らる事
僅の小勢に多く敵にかる死物犯ひの不敵者相見

怪我も多し只射を取ると青くは東沙林集て思ひ
切らざるは難く五騎七騎十騎二十騎矢在に
打取られ戦後の大勢あり先を實守り青くは中
山東沙林僅り十三に騎に取れて日も暮る方なり水は
漸く熱く通りて言楯山に引退き水邊に息を休め居た
り去程に今朝打撃されし一取上勢方の首も彼方の
方けに取られ居る者東沙林に旗印をえり扱ふに家
上の先陣味方の人々を愧令一取にあらりて五人定
て馳せ居りたり中山玄蕃東沙林四布大に悦び
上は勢にそは山に取り居り取取けあり明日は後日にも

後請も到着ありしと勢方の氣を助けて戦いとて諸
卒を以てしれども今朝撃りて兵糧をもききし方水
人々此より去るに計りはやれども身足弱に足るは東沙林
を飛くは勢方の糧を破分りたりして言楯山に籠りし
誰とぞ中山玄蕃同く主膳(守)在東沙林四布大目同く
新左馬伊良子宗三布日世門孫門を橋動孫
二左志左馬実河江筑後坂孫左馬深山九布在
之浦動左馬(等)を始りて之勢の軍に討殺されし兵
共勢方三百余人二年に成りて坂の上は東沙林に大目
大將として山の首を中山玄蕃押へり去程に越後勢

二万余人楯板をもちて松原野原に及んで青葉を是れ楯
原常陸守の中庄勝頼を避けて明日富上北後討つ
獲えし今日終日の戦ひに當られたる小勢のうき討取る
へしそ兵庫既先陣にて鯨波の勢をきしめた山の上にも圍
を付けて待たせり越後勢の中にも越後玉大向の住人下
治右馬之井もた山の下は作系八右馬杯もたるる名も
了責入りたる中山親子赤法林兄弟も前夜を不知
し成の刻より亥の下刻を息を止して防戦しりる哉
後の大勢に取られ死のうちに一生を以て終るに二百余
人とてし只七族はを成りしける中山親子三人矢柄重
為主従二人一所に戦ひり赤法林兄弟餘りし深入して
之留少木と切つて死生もを成りし氣合は是とそ
とそ言稍山の後より谷路を遁れし酒田漢出き一取上の
地垣入りりる名柄歩斬りて羽黒山の林原赤川と云所に
て少介の氣を隠しり越後勢も退けりる赤法林
兄弟も鬼清丸郎と云郎等と只三人あり大將重長と
討んと欲し然れり之留少木の陣入りて丸島兵庫子
率先を見知りて大音を呼たりる富原の者富原上方
此軍將赤法林後と見えし赤法林丸島兵庫が堅め
り是れ港を以て突かれ陣原に在りり百人余并て出東

法林三人をかくみたる成政中へ居せしめんと打突ひ運
此強き人々を赤見短し丸をなしたふ運を打合し我分が
首をとり景勝公捕けしとて大長刀を以て躍りたり
これ百余人の兵を四角へまると引散りて只弓と鉄炮と呼
りたる法林三人あつたをかく破りて難兵を合して大死せし
詮ありし瀧辺をまいて逃れ行く小陣を告げし只今落
初ハ敵初東法林成を打首とて叫び瀧邊に驚くと詭計
けり馬武者近く追寄し東法林引返して長刀
と打振り馬の尻をまくりて丸を以て運せしめり湯の
濱を逃出せし静まり休む敵追ひ来る馬を取てあがり
んもの侍居るを夜を明し曉頃いり富樫兵左馬秋山縫之
助と云者上下五六人し明和をもちて馳来り後より大勢
まきこみ所鬼法九布濠を以てはつと出て落人なしありと富
樫の腹を突立たる秋山縫助馬乗りあせ法を以て突
かちを新左馬の地あり長刀をもち掃ひ雑兵を逐け
退く間に富樫の馬に四席大夫打寄り秋山の馬に新左馬
乗りしより清九布の腰の兵糧が家あり撒り成る太刀を
奪ひ取し腰に附れ東法林兄弟打てし哉後の侍達
北まを河川送り近頃舟乗りて悦入る馬とて中法不中首ハ
尚座の引出物中在及宣敷り強きしと瀧道ありと

鐵子の舟渡しに着けり跡より追かけし越後勢安からま
思ひ返せしと叫り走る矢を射たり舟渡しをり清九
郎渡し守を呼て法川迄走り玉へ中く酒田迄敵方内
通の者有と云後か多しとて宮の浦の者を呼ひ喜舟を催し
多量の追手の兵大勢群つて射あぐる中し物取の者敵
只三人成るに走矢にて云甲斐おし実落をそ下知れり
東浦林兄弟引返し長刀を打拂ひ追手の思はし一丁
はかり引退く東浦林狩も勢入りけ流石の大勢二人切
先に退きを引退く東浦林主従難なく渡場に至り身
を置き居るに敵も怖れを退き来りもそより舟を調ひ打

守を大勢の以て越後の人々是迄走りやいとまよと云静
常川をのほり梶取二人は櫓を押し退き汝ら此浦の者死り
我ら寂上村山郡沼ノ平館主東浦林集人進り子也郎
大妻を云兄弟の者あり此夜の働を兄を後ち人にも語り
守せよ此夜の常狐大妻ありと銀子を取らせし此二人分
梶取のりくとも押しに殺しあめく明け砂越表と云
所にて成政方の冒成に云らるる今夜先をけしてお程の道
戦い勞れりといふと子楯山を敵に落とされお免くと寂上
へ帰らん甲斐も義光公後諸ある時父の苗主を打捨て
数多の家の子討死をせ至從三之のこ生駒を馬に乗りを見

侍女と伺ひ山楯と申す家上方池田備前守中一人
毎々一昨日尾浦まで討死せしれ家上方の人一行方志れも
お成りと語りしれ東海林さまの御人こそ未き新山最勝
寺の山坊に下りて早鐘を撞て里人を集めり告ぐるは
昨日家上我光公に出陣お成り先陣東海林の御方共同
新左衛門地集りしり云方より東海林方致されしと云れ此
里人共及び尾浦敗走の兵京田より遁れし者共又名主
を始り我もくと馳集り池田備前守の御方共親音寺三条
寺田立の格星川流平生石とか沢堀の内村田吾羽川布
目の在家を逼りし七百余人集りし名とらに要害能き所

に陣をとり朝日出る古殿を奈良橋の道筋堀切柵結廻し
兵糧を運もて此城の用意を成しける尾浦より追手の
兵来りし加程に大勢馳集りし事とれ左右共打ある
手極く尾浦へ注進に及りし事

我光公到庄内堺帰陣し事

一 去程に千安川を楯山と申す夜の合戦に越後勢が打勝て
本庄重長同膳款丸等兵庫既等大に悦び大浦山
に大陣を張り此夜の軍の次身并右馬既虎に助
人の首級に右馬既の太刀を添て上杉景勝公注進し
賞檢に入らせし景勝公斜赤も悦び玉をりしに義

光公龍舟引率、と庄内境より出長舟を尾浦の城に
登り、古馬臥虎の時を外吐方戦うを討死ぬる事、少石を
扱も御意なき御牙より後詰の押寄せぬうち、其力ら及
まを急ぎ、打寄せ戦ふべきものを、中山玄春、東浦林
口、府大夫のいふ成りしを、伺ひまひ、是、昨夜、高楯山
と云所に深入りし、款に取巻れ、討死を討死志し、るとも
中、又、新島、知れをも、中、其、義光公、宣ひ、は、被、等
ハ物、別、し、る、者、其、左、右、を、討、死、せ、ま、し、何、ん、か、恐、ひ、て
阿、かん、さ、楠、の、軍、の、次、方、を、伺、ひ、至、し、は、十五、里、原、と、銘、霧
に、紛、れ、て、落、延、し、羽、馬、山、乃、林、原、に、て、人、馬、を、休、め、打、越、し、は

中山、東、浦、林、に、し、逢、ひ、付、り、ま、し、と、白、岩、備、前、守、中、上、其、義
光、公、少、石、を、押、寄せ、と、宣、ひ、は、氏、家、尾、張、守、中、上、其、は
此、夜、ハ、俄、の、中、出、陣、故、に、味、方、小、勢、を、款、大、軍、を、り、又
至、人、も、乞、せ、り、者、多、く、以、て、延、引、能、く、し、中、上、其、も
頻、りに、宣、ひ、は、一、昨、軒、進、し、出、味、方、の、氣、お、く、以、て、後、詰、り
し、る、大、敵、に、取、取、合、死、す、ら、ん、を、折、を、得、重、ぬ、て、而、僅、し
即、令、残、有、之、ら、ず、即、利、違、有、之、し、と、違、て、中、上、其、義、光
を、怒、り、を、押、て、帰、陣、せ、り、と、る
東、浦、林、口、府、大、士、銘、山、に、楯、死、す、先、其、其、新、く、此、り
返、し、至、ら、ず、一、日、遅、延、が、其、危、命、を、多、く、有、り、と、後

天下一統に治り、私の軍を成りかゝり、故に年久も在り、
上杉家の領地と成り、義光は可成り遠恨に思召
時節を待たず、石田の反逆に依て、其際戦を起し
て終いに年来の望を遂げし事なり

朝山餘起并東海林家上へ歸りし事

去程に義光公の陣の後、は飽海田川乃二郡越後方に附
き、本庄出雲守重長尾浦乃城に居住して二郡を司る
一所に酒田港より二里計り隔て平田領、日山と云所に最
上乃越兵楠籠りたりと、猶又蹤きあへり、是東海林見
牙敗軍乃兵を集めて僅に二千人を擁りて籠城し、郷民

羽黒高雄の僧徒を僅に一平余、砂越表より存し、所
々を追捕し、酒田濱飯盛塚と云所に出張し、越後勢の
陣を漸寺の柵を眼下に見あるとして、善戦ふ本庄に、
其義徳後武友出羽守二十余人、柵より二里に外に濱路を
以て敵の後を、取却て善戦す、越後勢は佐林甲斐守
此兵酒田の所口を以て防ぎ、在東海林に、本庄十余人
の内より精兵五十余人、東海林新た馬を大おとすと、羽黒
此辨寛高雄の源光と一騎当千、北者一平に成ると、義
徳の陣より、本庄武友、武友兵、庫に、臨み、おりの
兵飯盛山に籠り、おとす、本間、佐守、本勢、十余人

乃形りて素戔飯成山の柵も既に危く見くし亦左の濱

路より東沙林に席大夫の勢敵の陣へ割て入り征回れり

彦義徳の勢先陣後陣備と乱しと敗走し色部播磨

守元冠白須賀丹後守相馬丸左衛門と惣とく富徳の者

多く討ちりり東沙林新左衛門の僅に幸余丸兵衛兵衛

等の千余人のあけり戦りし先陣後陣未散らさる

大所菅笠堂宇土河原と引退しり日も既に入暮り成り

これ相同筑前守人数を引あけり東沙林も大夫の兵も

去りし身を休りしる越後勢酒田をさし引退くを

見と重忠と重忠や人々も飯盛山の地武士を走り出

る此東沙林兄弟を先て長進を制し苗も飯盛山に

引籠りたる先日尾浦を遁れし時之境之騎ありしり

輕山少輔籠り砂越の柵を打随て近郷を經僅しと飛

田積代熊手村飛鳥久保田深曾孫布目園村言雄山一

糸青沢觀音寺清龍寺若王寺新田目あさるさふ

走らゆり先附隨ひり兵糧人夫河山にて一千余人を

引率しと救目を重福なる昔程に酒田勢敵軍の趣き

尾浦へ進しり兵中庄重長太に惣とく重七竹田主水

熊谷長吉馬を本物とて一千余人飯盛山討ちをさし

狩川より砂越に打入り輕山の通路を塞ぎ近郷を責

道より西海田川の岸に流るる東漸寺の柵に忍び伏るる折しも
中司前守の者の者を是を見付し夜更に大勢を遁る
何者そと然らむれ源範進と出て是の荒瀬山に虚空藏
別当何某と十山伏にありし四人の所徒の糧米を送り
持て通るに不審と思召さる人を介して書内をせ給ふれと
之をれは是を見て雲の山伏を中司と云ふなり此れも見届
此為めそ是程二人附流きり途中に源範進を見合
彼の二人を切伏せり是より君むやかに使を命じて同井隆茂の
方へ右の趣をいれ隆茂大司の事ありとそ一族を集めて評
議するに隆茂之男隆信進に出中司を捕る様の時者ありと
ありと云ふより東漸寺右馬頭と忍切流る義光公にも思顧

此我ら此れ一分を立旗を揚ぐし刻に東法林兄弟の義勇
と多くに頼まれ中司取所の事ありといささか此の隆茂
を始に一門を以て別流の範を招き源範大に悦び謀の
評議及びありかくて夜討に合はし以上評議及び是の
ハ其用言はしとて柵の表に番士を置き軍議ありあり隆
茂中司の兎角は色に味方の者も数多あり公れと中司達
かりて計らむかし東法林後中司有て義光公の御召ありと
披語し玉を給ふしと日午の刻に源範進又忍び出る飯
登山歸りしに中司前守の者昨夜二人の是輕途

中に切殺されし。則夜廻りの者以由を生ずれ。上の山岡井の方へ
使を遣ふして昨夜手の者二人を殺所荒瀬の土民普通に行に
差遣出し。所途中に切捨に改しを陣へ入り。所以に味
も亦く。差遣る。多き。道を。得。る。急。度。返。り。改。ま。り。由。り。け
れ。隆。信。則。使。者。を。召。取。り。し。り。れ。服。危。物。を。出。進。し。出。云
々。東。海。林。後。未。而。越。し。し。事。起。り。謀。事。成。難。く
能。ま。い。た。ら。む。返。り。し。出。向。て。中。間。に。傍。越。り。越。東。に。存
り。昨夜。荒。瀬。野。沢。の。村。より。糧。米。持。来。り。し。所。は。か。る。山。家。の。者
共。奥。卒。尔。仕。り。由。急。に。吟。味。改。し。中。人。出。可。中。に。存。り。所。近
引。け。り。と。返。り。し。使。者。を。返。し。し。中。間。筑。前。守。叔。上。の。山。の。様。子

如何と向ふ。俄に柵を破り。一門に侵入し。居て。昨夜。来。り。たる
者。共。ら。と。覺。し。ま。者。數。多。大。唐。間。に。居。餘。り。甚。言。策。沙。堂。と。並
居。何。れ。曲。居。改。ま。り。人。の。金。を。別。公。金。と。し。人。と
中。を。れ。は。方。大。將。也。居。坐。屏。義。務。告。重。則。中。間。を。召。し。て
吟。味。有。り。し。り。即。ち。中。間。筑。前。守。使。者。を。以。て。示。合。を。召。有
之。り。台。子。を。差。遣。り。し。り。越。し。上。の。山。中。に。多。く。隆。信。畏。り
去。り。不。使。に。召。取。り。し。り。出。可。中。間。返。り。し。り。上。に。疑。ふ
屋。を。た。ち。を。召。捕。り。し。り。年。を。召。取。り。し。り。隆。信。を。召。取。
り。物。の。具。置。を。待。た。し。り。高。子。太。上。皇。親。隆。信。方。奮。激
防。戦。し。り。高。子。を。追。捕。し。敗。走。り。去。程。に。源。範。高。子

はる飯登山の事へ先相見言雄の僧徒の外一上味の者其
亦少くも熊谷長左衛門内主水に降参り去程に新目山
開き渡して後飯登の柵に籠る兵共七所越飛多此支取少くは
落初多踏る人といふ在少林新なる島等法九郎等雄の法
師海通羽鳥の年寛里見宇添大石堂六郎彼是二十七八人あり
如何にせんあまれば是所に上野山より四郎大兼使札ありて今夜是
柵を奪ては方東よりしとあり人々是を見て上野山の勢心程有
と亦昨夜き三千計りししうを新千は是も亦と承る就て
在漸寺の柵へ押寄と昨夜討て有るを交克と定られと
て瑞り言酒田の新目山落城に進み越後方力を得寂上方退散

しと亦在少林柵自井父子を招きは頭毎夜味方捕利に
て勢も増り既に十七首と取交へ功を施しはくとも新目山
軍流しと味方悉く敵上属多上は以城計りては
成身一夜のうちに落英七備を成りしと亦以城ももたや
貴為り我を計りては亦に面方より之を以得る今うち
打出在漸寺を打破りしと人中に於降信りたるは
仰むにしる兵部二万余味方の僅りよして打出りし只
的に敵と敗軍走ししと中寂上よりも加勢も見今
敵の戦ひ思ひ當り城を中寂成改重なりて亦方の意見
たに亦るは新目山軍を以落初飯登は降るも皆出入す此

味方の謀計、私に今夜一戦不及を以て味方
殲滅して後唯落城の命あり殊に敵上の後詰由り
有るを以て白岩傍前何りあぐ引返せし、敵等の信
義を疑ひ誰者か中へまゐりしを、我ら敵上出立の時思
ひ定ま一隊内を誘ひて、みづも對面敵しををり並
く甲を以て今更敵に圍をれ叶ふ時に助を乞ふと思は
思ひもあらず、今夜一戦に同心し生前の思ひ出
是と云ひ、差違命あり、誰破て之を雄の色要害の柵
に入雌雄を争はんと見んとせられたる、以て共に同心し敵を
を斃千人余り、東海寺にも兼て先陣上泉主水

柏徳彌花二陣山石田式部直江島守三陣春智有為
四陣杉原常陸守長尾右衛門五陣久下八郎義忠
左京右衛門中在圖書之助七陣墨崎犯後守矢塚九
郎義忠八陣、大將本庄義経あり、明永六月八日、僅
北敵上勢を以てたまにも、猶もさりと見ざるなり、されども少も
屈せざる、北陣中より、四郎方丈も、前夜の
敵の目を以て大將の中陣へ、中へ入らん、中へ入れし、敵の
大勢敵を以て、青を以て、東海林矢倉に、百之廿四人討れて
進、之を以て、東海林、中陣へ、中へ入らん、中へ入らん、所は、大將
東海林、後、之を見、集り、せし、中へ、越後、玉、住人、系、中へ、

作釋家希者其先年時方々原軍をとり武田小糸
と戦ふ處の全戦に一つも不覚を與ふ者希存す
大將の目をあけしはも相争ふ意は有まし老後の思出
あ合玉と云ふ事と雖も東海林懇懇に名譽る武者を切捨
はせん事情あしと雖も相争ふ事にも足る老武者故取て
押入打取りをまき目も夕陽よ及びたれ東海林陣黨五
十七人山路をきくと落行き各中々る斬道毎度
戦利を得る事と運命つとあくして至切を見先
吾等の戦ひに故多の人を殺害せしむる皆我ら罪あり
之様の事思ひ入り落へき人々道水玉我等兄弟
中存重長い降を乞ふ切腹と諸人に誓ふんと云ふれ
吾等海邊と始の誰くも切腹をたれと小平と之折の
山寺といそそ夜を明し各休身しりり東海林成政を
此傳を執て吾等七人の若衆に於て座敷上方一味の族妻子
等助命に於てい東海林兄弟等雄海邊等速に切
腹誠言首を軍門に懸らむと委細書認り浦田の陣所へ
参りたる吾等酒田に故多の兵士討死し割へ敵將落
初りれ重き行を評死しりり東海林の使者僧俗元
来り右の敵中々る評死し一日軍の法を以て捕刑其
まをれも敵將我勇有る兄弟命を替へ切腹して取合

取酒宴を乞ふに東海林一門より其人方へ謝儀進物の故
を送りけける東海林兄弟勇力よく義とし、案に頼母し
かりし事もあり、庄内よても東漸寺右馬殿傷き東海
林兄弟の歸見たり、案に案上の或士の花も、案欠も兼る
者、其の人、とありし事ありしことかや

出羽一國繪圖之内寫

一 鶴岡城古大宝寺、城下云大宝寺村に在り、鶴岡、
近代最上家より改稱す

一 清川五所王子、義経記に載る社あり、義経の宝物
あり、愚考御諸別王子

一 大河の南、界郡北、飽海郡あり、寛文四年、梯引郡遊
佐郡と書さるを禁し、田川飽海兩郡とも、往古井口
地と云し、大宮村より木川村の下迄に在り、實録に
國府在出羽郡井口地と云、依て出羽郡、田川郡の
前名と云ふこと、神名帳伊氏波神社田川郡に属する

を以て證す且実録に海水漲移迫府六里と有る
を見て大宮村の地辺を井口地と今地勢移りて井戸
淵と呼ぶ里名記に委しく記す

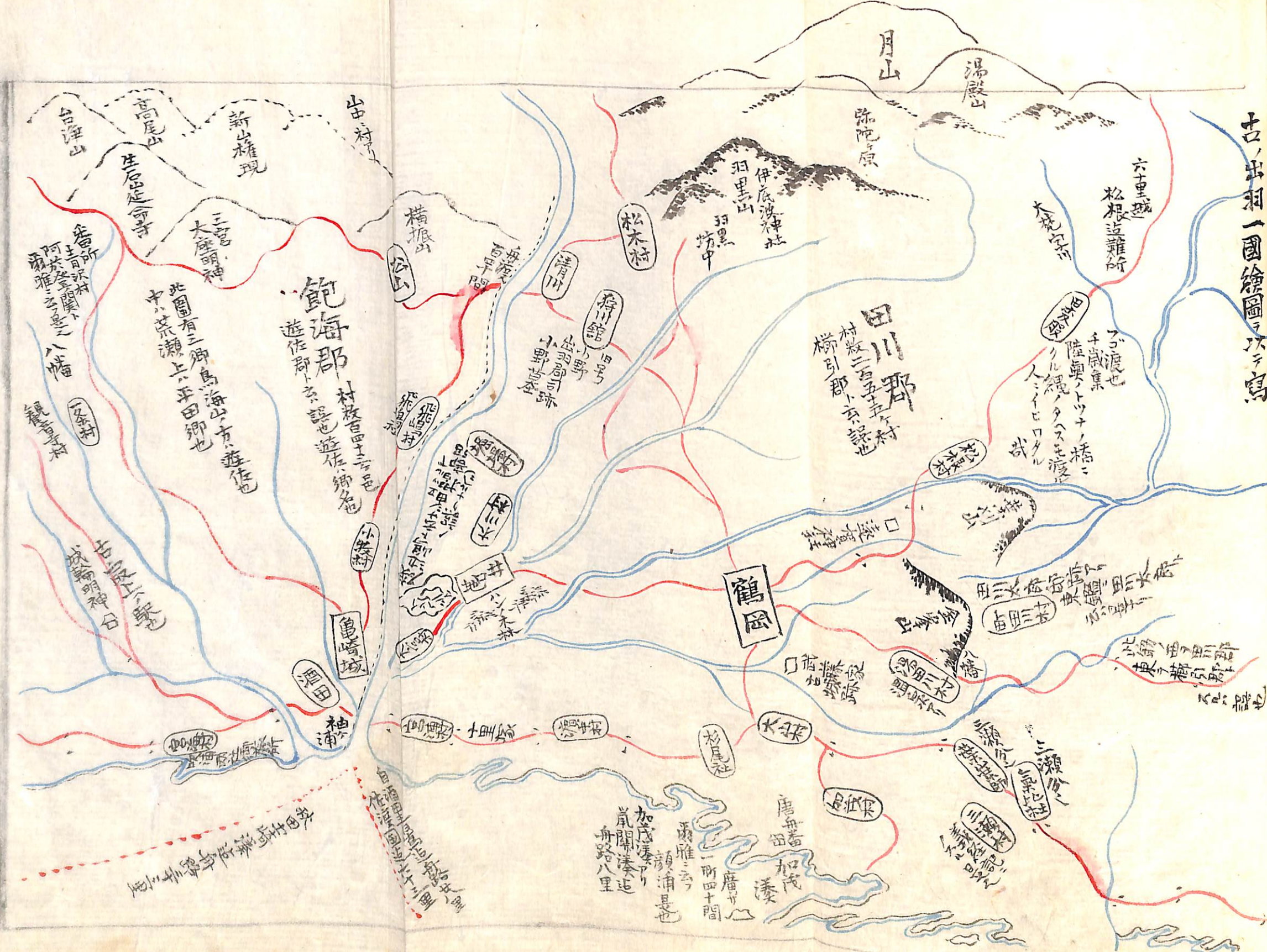
一 亀崎城酒田ももに支河より南に去り但亀崎のと云ふ
号は近代の事也

66154

一 狩川館合主とす近代述義光朝臣の家士北館大
学助領之兩城以前の地也

一 龜岡城古大宮村の地と云ふ大宮村は古大宮村の地也

予嘗て國地圖を看



六重越
松根近難所

月山

湯殿山

荒瀬原

伊底波神社
羽里山
羽里坊中

松木村

清川

舟形館

田川郡
村数二百五十五ヶ村
榑引郡下立部也

千歳集
陸奥トツナノ橋ニ
クル観タスモ渡
人ニイロクタル
也

飽海郡
村数百四十五ヶ村
遊佐郡下立部也

此圖有三角島海山有遊佐也
中ノ荒瀬上ノ平田郷也

鶴岡

田三ノ宮
田三ノ宮
田三ノ宮
田三ノ宮
田三ノ宮

龜崎城

栗田

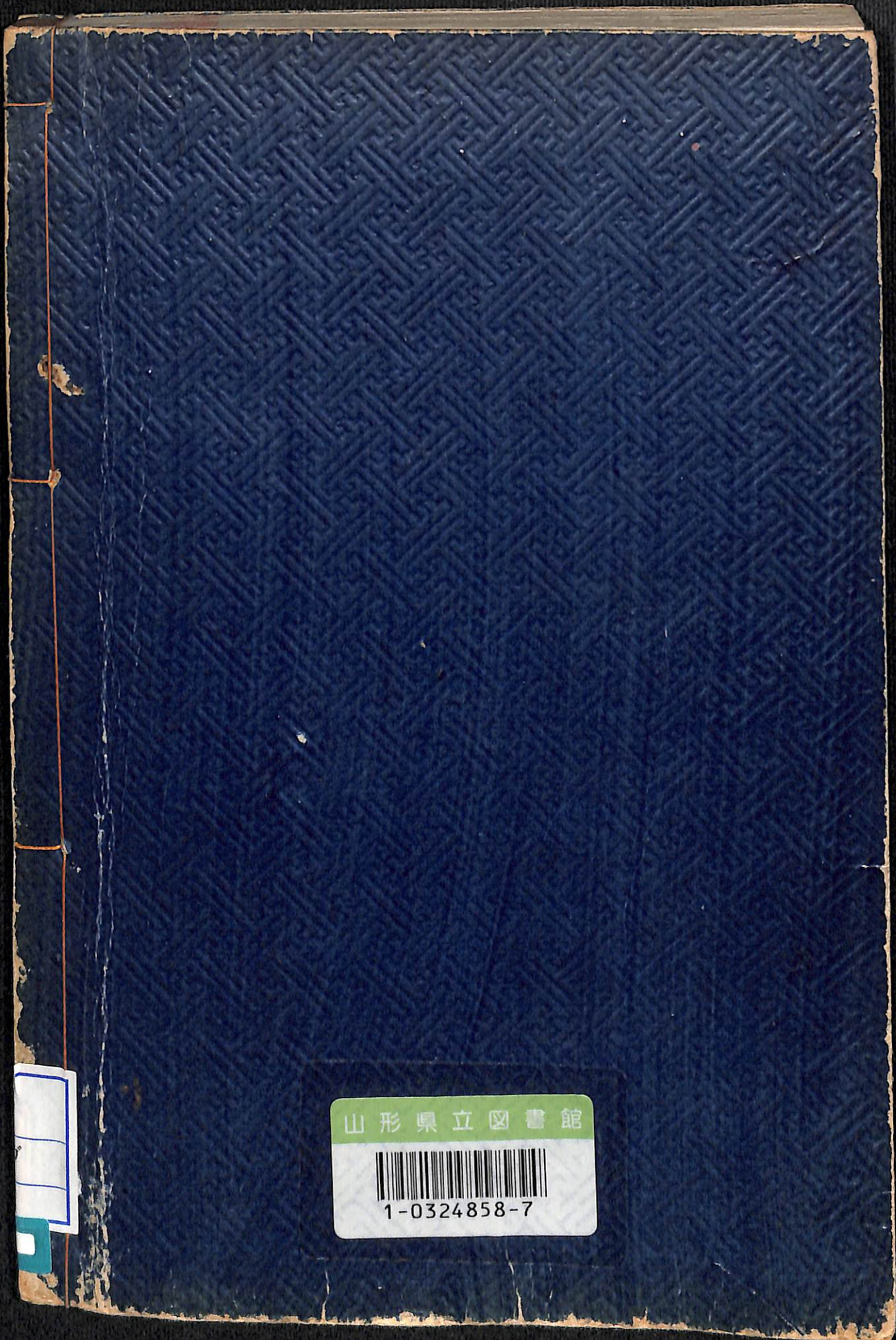
神浦

大塚

杉里社

唐無蓋加茂
廣川
一町四十間
雨雅三ノ
顔浦是也
加茂湊
嵐關湊
舟路八里

此川州邊所城或村田等



山形県立図書館



1-0324858-7

Small white label on the spine edge with a blue border and a small blue tab at the bottom.